

保育者イメージと自己イメージの調査 その2

— 保育科学生におけるライフスタイルの変化 III —

天 野 珠 子

Life-styles of Preschool Education Department Students at Komazawa Women's Junior College/III:

Their image of Themselves and of Preschool Teachers/No.2

Tamako AMANO

I はじめに

本研究は、昨年スタートした保育科教員有志による学生の総理解をめざす共同研究の一部である。共同研究の意図は、学生の心身の健康状態、日常生活、学習に対する意欲、保育者像と自己の適性、進路など多角的視野にわたってその実態と意識を把握することである。我々教員側においては、本学保育科を志望し入学してきた学生たちの情報を的確につかみ、彼女等の学習意欲を満足させ正しい保育観と保育職への希望を培わなければならない。本研究においては、主に学生の保育に関連する意識を中心に調査、検討を受け持っている。昨年度調査の反省から、子どもに関するイメージ、単位習得に関連することがらについての気がかりや悩みなども追加して、より調査範囲を広げた。また、記述回答を検討し、個別な傾向の把握も配慮してみた。

研究開始2年目で、卒業時の意識は次年度になるが、今回は今年度(1993年度)入学生の調査を中心に報告することにした。

II 研究目的

1. 1993年度保育科入学生の保育職意識を探る。(1992年度入学生との比較を含む)
2. 入学時における学習に関連する内容(朝礼、成績、出欠、実習、ボランティア)の重視度意識を探る。
3. 入学時点における子ども観を探る。
4. 入学時点における不安定要素を探る。

5. 入学時における保育者イメージと自己イメージを探る(1992年度入学生との比較を含む)

※ 2.3.4.は、今回新たに設けた項目である。

III 研究方法

1. 対象…1993年に駒沢女子短期大学保育科に入学した学生(現1年生)122名、比較対象として1992年保育科入学の現2年生(180名)の調査結果^(註1)
2. 時期…1993年(平成5年)4月下旬
3. 方法…アンケート調査(授業時間に実施)
4. 内容…(1) 保育職に関連する意識の調査
(2) 学習内容に関連する意識の調査
(3) イメージに関連する調査

IV 研究結果と考察

1. 保育職に関連する意識調査結果

- (1) 保育職にたいする適否とその理由に関する意識調査

本年度入学生は、保育科を第一志望としていた者(94.3%)及び資格取得希望(幼稚園教諭免許希望90.9%、保母資格希望86.8%)において前年を若干ではあるが、上回っている。(詳細は共同研究II参照)^(註2)

まずそれらの学生の自己診断による保育職への適否とその理由についてみることにする。

保育者に自分が向いているかどうかの意識(図1)では「非常に」と「やや」をあわせる

と63.2%、「あまり」「まったく」向いていないは5.7%である。また「どちらともいえない」と回答した学生は、前年度(25%)より6.1%増加している。

次に「保育職に向いている」と回答した学生がその理由としてあげている内容(多肢選択法)(図2)をみると、①「子どもが好きだから」②「健康だから」③「明朗活発だから」④「熱意があるから」の順であり、昨年度の2位と1位から4位まで同じ理由である。ちなみに日本私立短期大学協会の同項目による全国調査結果(1991年度、対象…私立短期大学 210校 25,360名^(註2)に実施)と比較しても同じ順位であった。また、「ピアノがよく弾けるから」という理由をあげた学生が、昨年度は3.4%ほどあった

のであるが、保育における適性としてひとりも該当項目を選んでいないということは、ピアノの技術と保育の関連についての意識が薄くなってきている傾向を示しているといえよう。

次に自分が保育者に向いていないと思っている学生はその理由として、①「自信がない」(57.1%)、②「性格的に向いていない」(28.6%)となった。(図3)

昨年の結果および短大協会の結果も同じような傾向にある。短大協会の結果には卒業時の調査もあるが、その結果によると「自信がない」から保育者に向いていないとする学生は入学時より13.2%増加している。^(註3) 本学の学生は2年後どのような意識を持つのか、気がかりな一面である。

図1 保育職に対する適否

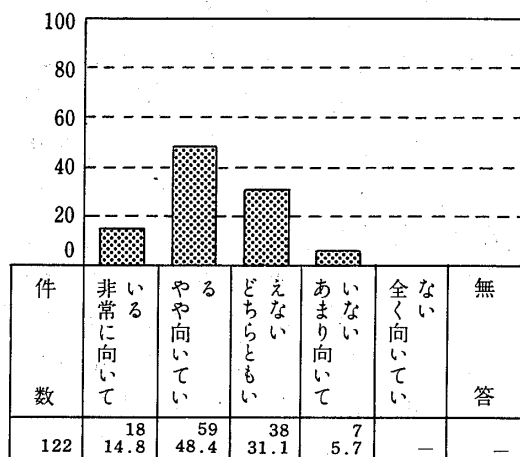


図3 保育職にむいていない理由

保育職に対する適否 (向いていない=あまり+全く)

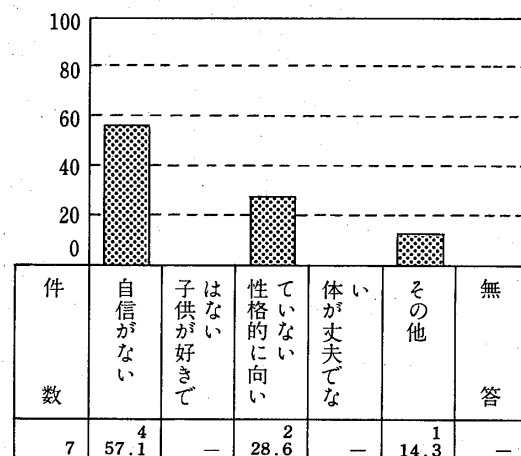
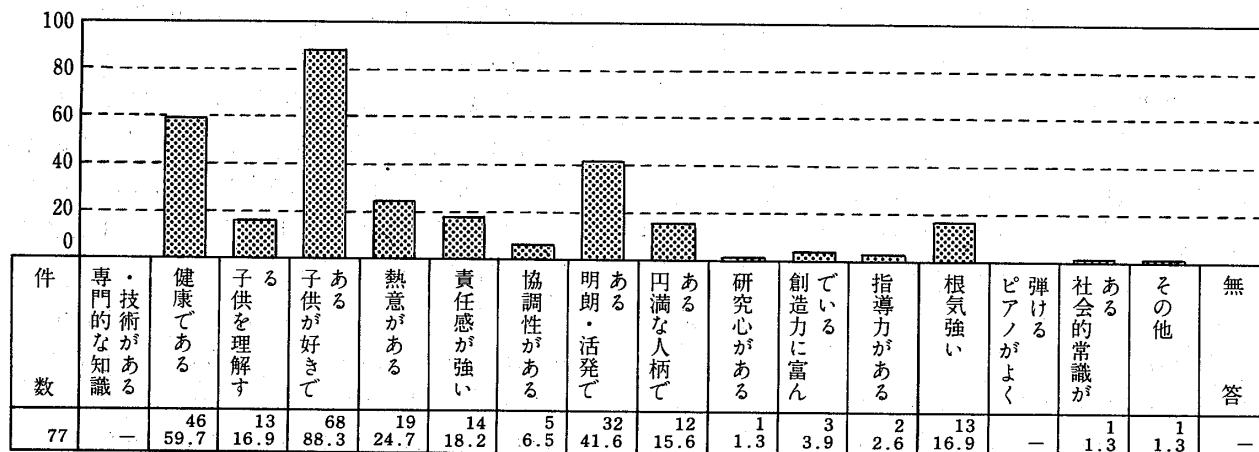


図2 保育職にむいている理由

保育職に対する適否 (向いている(非常に+やや))



(2) 「保育職に就きたいかどうか」と「保育職のイメージ」との関連意識について

両者をクロス集計してみると(表1)「就きたい」と思っている学生と「就きたくない」と思っている学生の間には、次のような意識の差がみられる。

「就きたくない」学生は保育職のイメージを「対人関係が難しい」「重要だが社会的に認められていない」「高度な専門技術が要求される」という点において「就きたい」学生との間に差がかなりあることがわかる。「高度な専門技術」でみると「就きたい」学生はその必要性を1.1%しか意識していないのに対し、「就きたくない」学生においては、その必要性の意識を持つ者が20%である。反対に「向上心、研究心がなければ」という意識は、「就きたい」者では32.2%、3人にひとりの割合であるが、「就きたくない」者

では、0%である。「就きたい」者より「就きたくない」とする学生の方が、保育職について厳しい見方をしているといえよう。反対に保育職志向の学生は、保育科における学習に期待しているといえよう。

2. 学習内容に関連することがらの重視度について

本学保育科に在学するにあたって、直接関係する評価基準となる5項目について学生の意識を探ってみた。

(1) 朝礼について(図4)

本学には毎週月曜日に朝礼があり出欠をとる。例年の傾向として1年次の出席率は2年次より高い。特に入学当初であれば、参加の程度も高く意識的にもその重視度は高いのではないかと

表1 保育職のイメージ

■ Q4. 保育職希望の有無	件数	女性にふさわしい	心身ともに健康で	ならない	地味であまり目立たない	重要で社会的に認められている	向上心・研究心	がまらない	対人関係が難しい	術が要求される高度な専門的技術	しつかりした人生観・教育感がない	重要な認められていない	無答
合 計	122	58 58.5	99 81.1	9 7.4	19 15.6	37 30.3	25 20.5	4 3.3	59 48.4	26 21.3	8 6.6		
保育職に就きたい	87	41 41.1	68 78.2	3 3.4	15 17.2	28 32.2	16 18.4	1 1.1	42 48.3	19 21.8	8 9.2		
保育職には就きたくない	5	2 2.0	4 80.0	—	—	—	4 80.0	1 20.0	2 40.0	2 40.0	—		
まだわからない	30	15 50.0	27 90.0	6 20.0	4 13.3	9 30.0	5 15.7	2 6.7	15 50.0	5 16.7	—		
無答		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

図4 短大生活における重視度：朝礼

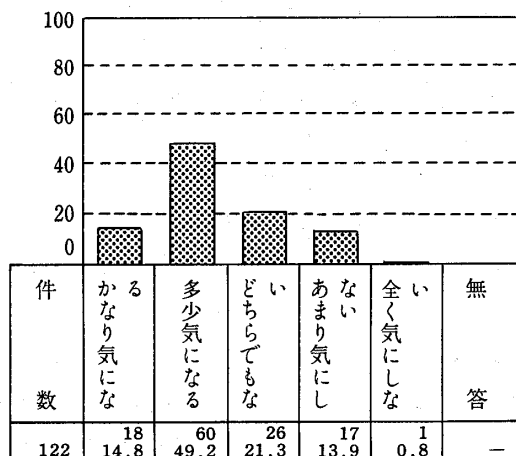


図5 短大生活における重視度：成績

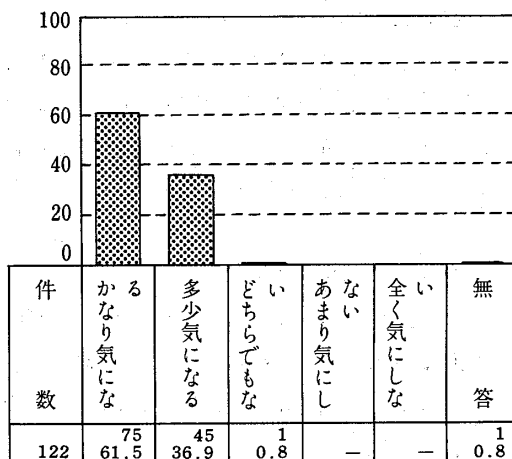


図6 短大生活における重視度：出欠

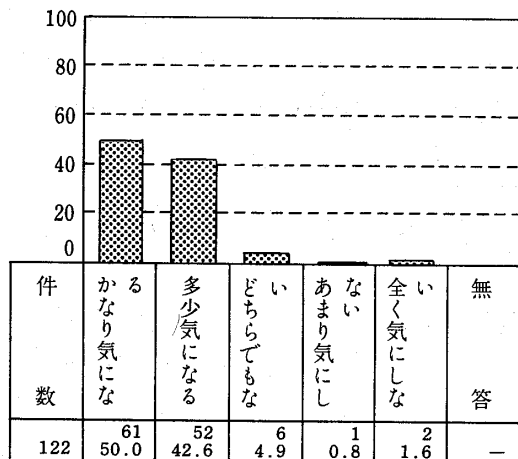
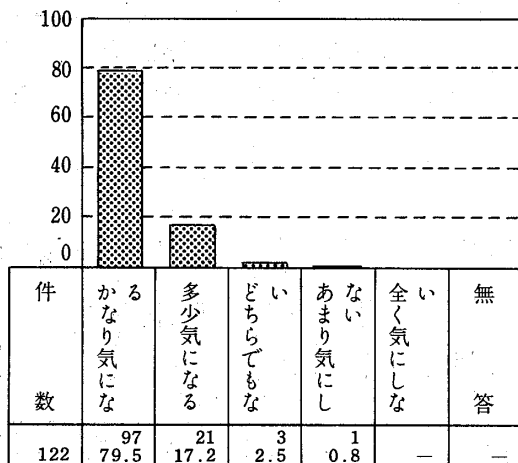


図7 4-4.短大生活における重視度：実習



思って調査した。結果からみると「かなり気になる」「多少気になる」の合計は64%で、「あまり気にしない」「全く気にしない」の合計は14.7%であった。朝礼を無視する学生は少ないといえる。

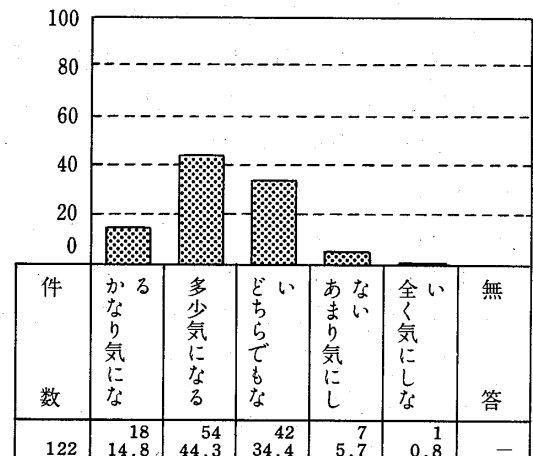
(2) 成績について (図5)

「かなり気になる」61.5%「多少気になる」36.9%を合わせると98.4%であり気にしない学生はひとりもない。ほとんどの学生は成績に関しての意識は高いという結果である。

(3) 出欠について (図6)

「かなり」「多少」気になるが、92.6%で成績の重視より6%弱、少ない。しかし重視度は全体的に高い。ちなみにあまり重要視していない者は9名である。

図8 4-5.短大生活における重視度：ボランティア



(4) 実習について (図7)

資格取得に必要な幼稚園、保育所、施設などの実習については、「気になる」の総数は96.7%であるが、「かなり気になる」が79.5%と非常に意識度が高い。現場での実習は、未経験の学生達にとって期待も大きいであろうが、不安も多く、意識度が強く出たといえよう。

(5) ボランティアについて (図8)

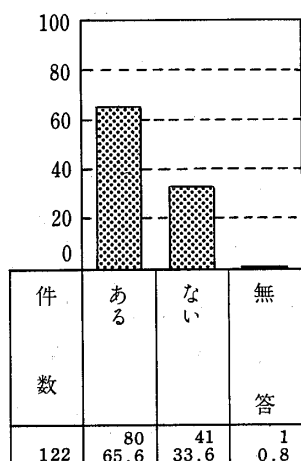
昨年より施設見学を中止し、学生の自発的意欲を高めるためボランティア活動を奨励している。現時点においては義務性ではないが活動をしたものは、報告することになっている。「かなり」「多少」気にしている学生は、59.1%である。また「気にしていない」学生は6.5%であった。教員側が考えているより多くの学生が、意識していたようである。しかし気にすることと実行とが結びつくとはいえないであろうから、今後の活動報告と比較してみる必要がある。

以上5項目について比較してみると、成績と実習が学生達の重視度の特に高いものといえる。

3. 乳幼児との接触経験と子どもに関するイメージについて

「乳幼児の世話や遊んだことがあるか」の問いについては「ある」65.6%、「ない」33.6%と3人中2人の割合で接触経験があるとしている。(図9)しかし

図9 乳幼児との接触経験



その内容についての記述をみると、弟妹や親戚、近所の子どもとの接触がほとんどである。幼稚園、保育所、施設などに手伝いや実習に行った経験を持つ者は少数であった。

次に子ども（幼児）から連想することばを自由記述により3種書かせた結果（表2）から子どもに対して学生が持っているイメージを見ると「可愛い」「素直」「元気」「小さい」「無邪気」が上位5位までで全体の65.2%を占めている。子どもに対して好意的、親密的イメージが強い。マイナスイメージとしては「うるさい」9位、「泣く」11位「生意気」13位などがある。

全体的に情意面のイメージが多いが、行動面「活発」「走る」や関連するもの「幼稚園」「保母」「母親」、自分側からの見方「研究心」「どうして？」など、実に多義にわたっている。

子どもの接触経験がある者が2/3と多いように思えるが、時間的には短くまた短発的である。したがって子どもに対するイメージも一般的で傍観者の、外面的、といえよう。今後実習や専門講義を通して、子どもに対してのイメージも保育者的な見方に変化していくのであろうか。

4. 現在、気になること（悩み）について

入学直後の学生にとって、新しい環境は、まだ馴染みも薄く、さまざまな戸惑いや悩みも多いのではないだろうか。一般的には5月病の時期である。表面には現れなくてもそのような傾向は学習や出欠にも影響する。経済面、家族面、友人面、異性面、容

（表2） 子ども（幼児）から連想することば

順位	項目	人数 (%)	順位	項目	人数 (%)
1	可愛い	77 (22.3)	28	頭がでかい	1 (0.3)
2	素直	40 (11.6)		未知	1 (0.3)
3	小さい	39 (11.3)		ちょこまか	1 (0.3)
4	元気	38 (11.0)		行動的	1 (0.3)
5	無邪気	31 (9.0)		危ない	1 (0.3)
6	笑顔	11 (3.2)		おもちゃ	1 (0.3)
	純粹	11 (3.2)		愛らしい	1 (0.3)
8	活発	10 (2.9)		ブランク	1 (0.3)
9	うるさい	9 (2.6)		小学校	1 (0.3)
10	遊び	8 (2.3)		正直	1 (0.3)
11	泣く	5 (1.4)		頑張り屋	1 (0.3)
12	創造力	4 (1.2)		頭が柔らかい	1 (0.3)
13	甘えん坊	3 (0.9)		公園	1 (0.3)
	明朗	3 (0.9)		動物園	1 (0.3)
	自由	3 (0.9)		草原	1 (0.3)
	真似	3 (0.9)		気まぐれ	1 (0.3)
	生意気	3 (0.9)		幼稚園	1 (0.3)
18	暖かい	2 (0.6)		保母	1 (0.3)
	一生懸命	2 (0.6)		研究心	1 (0.3)
	我儘	2 (0.6)		栄養	1 (0.3)
	素晴らしい	2 (0.6)		難しい	1 (0.3)
	あどけない	2 (0.6)		面白い	1 (0.3)
	走る	2 (0.6)		不安定	1 (0.3)
	好奇心	2 (0.6)		やんちゃ	1 (0.3)
	不思議	2 (0.6)		楽しい	1 (0.3)
	幼い	2 (0.6)		ふっくら	1 (0.3)
	母親(ママ)	2 (0.6)		「どうして？」	1 (0.3)
28	健気	1 (0.3)		眠る	1 (0.3)
	やわらかい	1 (0.3)		真っ白	1 (0.3)
	可能性	1 (0.3)		いきいき	1 (0.3)
	何でもやりたい	1 (0.3)		声が大き	1 (0.3)
	単刀直入	1 (0.3)		いたずら	1 (0.3)
	無限	1 (0.3)		寝顔	1 (0.3)

姿面、知的面、体力面、その他の8項目について該当箇所に自由記述方式により回答を得た結果(表3)について報告する。(複数回答)

- 1項目でも訴えのあった者は122名中61名で丁度半数であった。

- 経済面についての訴えは41名で全体の26.5%である。「ひとりで生活するので仕送りの額が足りるかどうか心配」といった地方から出てきた学生に共通する悩みが多かった。まだ一ヵ月未満の時期として当然の心配であろう。また、大学生活は高校時代と異なった出費がかさむようである。たとえば衣料品、化粧品などが買えない、飲食費が足りないなど、小遣い不足をあげる学生が多い。短大入学にともなう出費で親に負担がかかったこと、これからも出費がかさむことを気にしている者もあった。アルバイトについては、「どんなバイトを選んだらいいか」「授業内容が過密で今まで続けて

(表3) 「気になること」や「悩み」について

122名中 記述者61名 (50%) 回答総数(複数回答) 155

経済面 41 (26.5%)		知的面 31 (20.0%)	
お金(生活費、こずかい) 33		授業についていけない 11	
両親への負担 5		頭が悪い 7	
アルバイトに関して 3		ピアノが弾けない 5	
		テストが心配 4	
家族面 3 (1.9%)		世間知らず、常識がない 3	
喧嘩が多い 2		創造性に乏しい 1	
父親が心配症 1			
		体力面 18 (11.6%)	
友人面 11 (7.1%)		体力がない 10	
いない、少ない 8		持病、貧血、風邪 3	
ぎくしゃくしている 1		スポーツをする時間 1	
付き合い方 1		スポーツが苦手 1	
宗教に誘われる 1		サークル(運動)活動 1	
		遠距離通学の体力 1	
異性面 9 (5.8%)		朝起きられない 1	
自信がない 3			
片思い 3		その他 8 (5.2%)	
彼氏ができない 2		保育者の給料はやすい? 2	
怖い 1		卒業と就職について 1	
		ひとり暮らしで寝坊する 1	
容姿面 34 (21.9%)		あがり症 1	
デブ、痩せたい 16		不眠症 1	
ブス、美人になりたい 8		過食症 1	
足が太い、細くなりたい 4		時間が足りない 1	
背が高い、低い 2			
スタイル 2			
にきび、しみ 2			

きたバイトができない」などである。

- 家族面については、家族間の不和が2件、父親が心配症、つまり干渉が多いことへの不満が1件で計3件(1.9%)と意外に少なかった。
- 友人面では、短大での新しい友達関係に関するものであった。11名(7.1%)「新しい友人ができて楽しい、うれしい」などと書いている学生が多なかで、自分がとり残されそうな不安をもっている学生が数人ではあるがいるということである。友人とのトラブルに関するものが2件、友人の信仰する宗教の勧誘について悩んでいる者が1名であった。
- 異性面の記述は、9名(5.8%)であるが、現実の異性関係に関する悩みは全く記述されていなかった。これは異性間がうまくいっている、というよりまだ特定の異性がない学生がほとんどとみてよいのではないかと推測するが、今回の調査では詳細はわからない。
- 容姿面は経済面に次いで「気になる」「悩み」は

多い。34名(21.9%)特に体型に関するものが多く肥満を直接あげた者もあるが、もっと痩せたいという表現も多い。青年期の特徴である、客観的にどうかということより理想像との比較が多いのではないであろうか。顔に関しても、体型と同じくブス、顔が悪いなど直接的表現をする者ともっと美人になりたいという願望的表現に分れていた。

- 知的面では31名(20.0%)で、高校の授業と比較してのことが多い。たとえば90分授業がづらい、講義が難しい、保育関係以外の授業に魅力を感じられない、教員の態度への反感などから学習意欲がわからず、したがって授業についていけない心配、不安を持っているとするものが11名の内訳である。短大生活へ期待していたことと現実のギャップを感じているということであろう。また頭が悪いと自己評価した者が7名、ピアノの技術能力をあげた者が5名である。単位がとれるか、テストに落ちないかなど未経験からくる漠然とした不安をあげた者が4名であった。

- 体力面については18名(11.8%)の者が訴えている。高校時代に比べ体力が落ちた、疲れやすい、もともと体力に自信がない、などの記述が多い。体調をあげたものが3名でその内、持病があって保育者になれないという訴えが1名あった。
- その他は8名(5.2%)で保育職につきたいが給料が安いのが気になる、卒業できるのか、就職できるだろうか、と2年後のことを気にしている者が計3名、寝坊して遅刻することが多い、あまりに授業が過密で時間が足りないと悲鳴をあげた記述が各1名である。あがり症とは、指されて本を読む、質問に答える、などの時うまくいかない悩みである。不眠症、過食症と記述した学生は同一人物で、この学生は他の項目にも悩みが多く、したがって不眠、過食となるようである。

入学直後の学生の2人にひとり、何らかの精神的不安定状態にあるといえる。愁訴記述のない学生のアンケート用紙には、白紙あるいは「なし」の記述のみのものが多いが「ない」理由や先への期待、意欲を書いた学生もかなりあり参考になった。

また記述が1項目のみのものは、経済的理由が多く、容姿、知的、体力などにおいては、ひとりで複数回答する者が多い。同じ条件下でも気になる、気にならないは主観によるものが多く、個人差の影響が大きいのではないと思われる。

今後、共同研究Ⅰ^(註4)の調査と総合して個別な追跡ができると、詳細について検討できると思われる。

5. 保育者イメージと自己イメージについて

この調査は昨年(1992年)と全く同じ項目で行った。ただし昨年の反省から集計の手間を省くため、5段階をA～Eとして、右側に該当アルファベットを転記してもらった。

調査用紙についての詳細は、本学紀要第26号(1992年版)^(註5)を参考されたい。また項目の18、19、21の3項目は保育者と自己で内容が異なるので注意されたい。

(1) 保育者イメージの調査結果について(図10)

昨年との比較対照図として見ると明らかなように、プロフィールは驚くほど一致している。

「理性的-感情的」「学問的-実践的」において若干今年度の学生の方にマイナスポイント寄りがあるが、保育職が、「価値ある」仕事ではあるが「地味」で「苦勞の多い」ものだという認識においては、ほとんど変化はない。

(2) 自己イメージの調査結果について(図11)

保育者イメージと同じくこちらも昨年との比較対照図としてみた。保育者イメージにおいては、ある程度共通項目が多いであろうことは予想できたが、自己イメージまでがほとんど同じカーブを画いていることには、正直いって驚いてしまった。本学保育科をめざす学生の傾向が似ているのであろうか。保育系他校や他科、4大の学生との比較もしてみたいと思う。学生の傾向は、保育者の適性の1、2、3位(表2参照)にある「子ども好き」「健康」「明朗」とも一致している。ややマイナスよりのものとしては、「感情的」「実践的(理論的でない)」「頭が悪い」である。これが将来、幼児の保育、養育に携わる予定の大多数の学生の傾向であると思

図10

保育者イメージ(時系列)

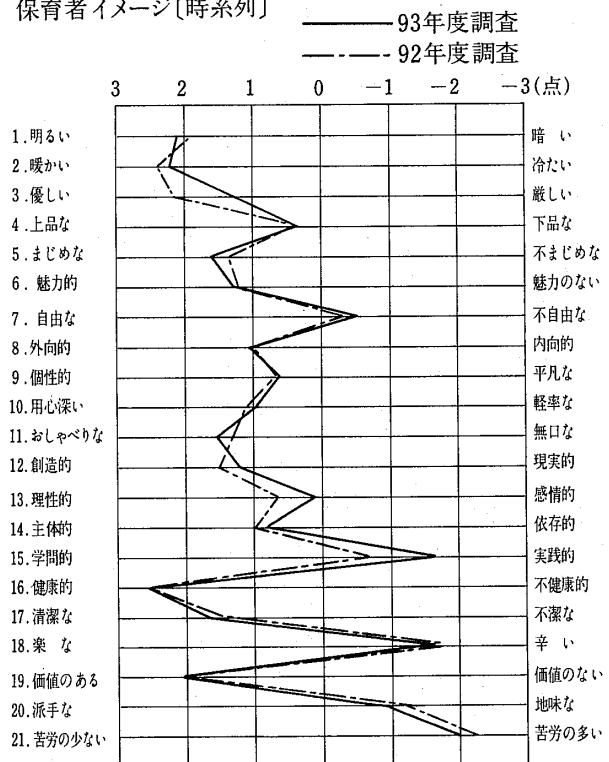


図11

自己イメージ(時系列)

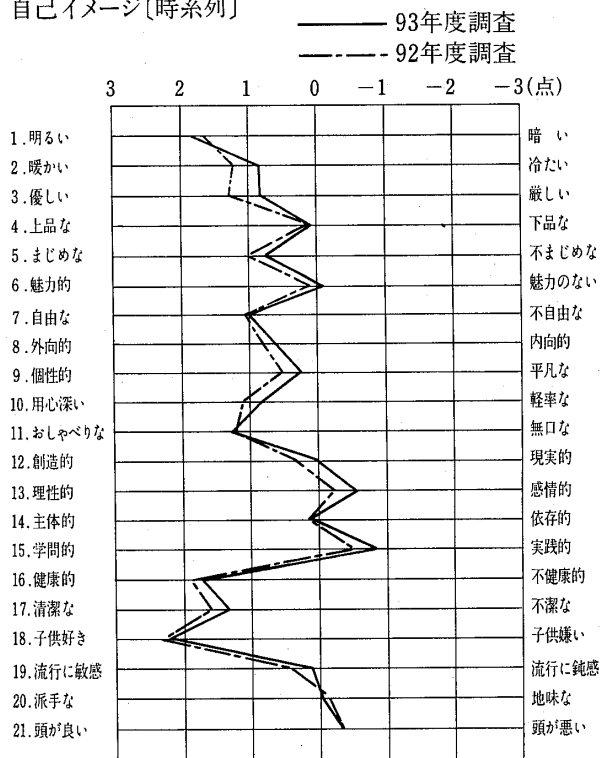
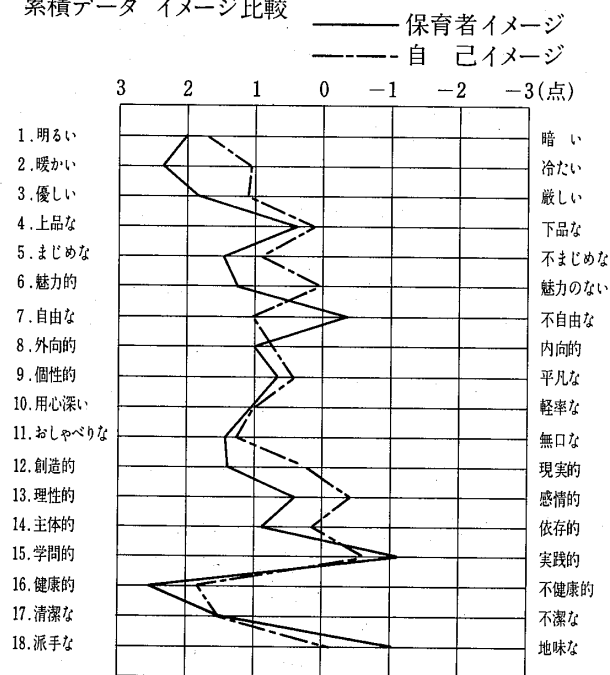


図12

累積データ イメージ比較



(92～93年度調査より)

うとため息さえもれてしまう。

また「暖かいー冷たい」「優しいー厳しい」の項目では、昨年より0.5ポイント程度マイナス寄りとなっている。

(3) 保育者イメージと自己イメージの比較(図12)

この調査は、今年度のみのは省略して、昨年度との累積データのみ掲載した。ちなみに今年度、保育者と自己が逆転した項目は「派手ー地味」についてのみである。今年の学生は、保育者に対して昨年の学生より地味傾向イメージを持ち、自己については昨年の学生より「派手」傾向の認識が強いという結果であった。

2年間の累積結果から言えることは、全体的に保育者イメージの方がプラスポイントが高いということである。自己イメージのほうにプラスとなった項目は、「自由」「派手」のみである。保育者のイメージは、「魅力的」で「優しく」「創造的」「理性的」「主体的」でなければならないが、自分はそこまでいっていないという意識である。

V まとめ

今年度は昨年同様入学時の学生の意識調査に止ま

っている。しかし、昨年の反省から集計データのみでなく、記述式による意識の把握と子どもについてのイメージや単位習得に関する学内生活上の意識調査にまで範囲を広げたため、より総合的に学生の意識が浮かびあがってきた。今回の調査では報告を省いたが、自由記述による意見欄には、2年間の学生生活に期待をしている者とすでに幻滅や自信を失っている者があった。また夢に見た保育者への第一歩を踏み出して自分が意欲を高めようとしている時、授業中騒いだり、保育職を希望しない者が保育科に入学していることに反感を抱いている者もあった。

講義科目や教員に対しては、高校時代とは違い専門科目が学べ張り合いがある、といった促え方がある一方で高校と同じような一般教科科目への不満、時間割りのゆとりのなさ、ピアノ、体育関係などの技術面への不安などさまざまなストレスも出ていた。時間の経過と環境への慣れなどにより、これらの幾つかは、入学時の一時的傾向として消えていくことと思われるが、また実習や講義を通して保育者への適性や進路、交友関係、異性問題など新たな悩みへと変化していくのではないだろうか。

我々教員側としては、専門の知識や技術指導のみならず、このような経験の増加により変化していく学生の意識変化を追っていくことは指導上意味のあることである。特に実習により直接、乳幼児と接触する機会があり、さらに資格取得が関わる科としては、心身ともに健全な保育者養成に務めなければならない。

今後さらに検討を加え、2年間の学生の意識変化を把握していきたい。

参考文献

- (註1) 天野珠子「保育者イメージと自己イメージの調査」駒沢女子短期大学研究紀要第26号 P.43～49 1993年
- (註2) 福川須美「ライフスタイルの変化II」投稿中
- (註3) 日本私立短期大学協会保育科研究委員会「保育科系短大意識調査報告書」(平成5年3月卒業生対象) P.17～18 1993年
- (註4) (註1) (註2)に同じ
- (註5) 高木庸一 宮崎恵「ライフスタイルの変化I」投稿中
- (註6) (註1)に同じ